新元号「令和」と久留米の意外なつながり

~万葉歌人　葛井大成~
（ふじいのおおなり）

天平２年梅花の宴とは

新元号「令和」の由来となった天平２年（730 年）梅花の宴は、大宰府の長官大伴旅人邸で催された宴です。九州管内の 32 人の役人が梅の花を肴にして盃を交わし、歌を詠み、春の到来を楽しみました。その序文の一節「時に、初春の令月にして、気淑（きよ）く風和らぎ、～後略～」が年号の由来となり、注目を集めていますが、この宴で６番目に歌を詠んだ筑後守葛井大夫（ちくごのかみふじいだいふ）とは、筑後国の長官である、葛井大成（ふじいのおおなり）です。今回はこの葛井大成について、ご紹介します。

場の空気を変えた、葛井大成の歌

「梅の花　今盛りなり　思ふどち　挿頭（かざし）にしてな　今盛りなり」

意訳（梅の花が今盛りだね、気の置けない仲間たちよ、
梅の花を頭にさして大いに盛り上がろうよ！）

筑後国府跡の調査成果から
復元された平安時代の宴のイメージ

この歌は葛井大成が梅花の宴で詠んだ歌です。この歌が詠まれた状況と、その場に与えた影響について、少し考えてみましょう。

天平２年当時、葛井大成は外従五位下であり、梅花の宴の出席者の中では、上から７番目に高い官位です。万葉集巻五、梅花の歌 32 首の掲載順を、そのまま歌が詠まれた順と仮定すると、６番目に詠っています。主催者である大伴旅人の言葉の後に、次席である大宰大弐が、そして３番目に大宰少弐である小野老（おののおゆ）が続き、宴を盛り上げる歌を詠みます。４番目の山上憶良（やまのうえのおくら）ともう一首、惜別の歌が続いたところで、話題を変えて、宴の参加者に梅の花を頭にさすという提案をします。これによって場が大いに盛り上がりました。

久留米にあった筑後国府（ちくごこくふ）

葛井大成の職場であった筑後国府は、久留米市合川町から御井町一帯にありました。国府は奈良時代に全国に置かれた役所であり、筑後国府は筑後地域の政治と経済の中心地でした。これまでの発掘調査では国司の館の跡や、政庁の跡、国内でもわずかしか出土していないイスラム陶器などが見つかっています。遺跡の重要な地区については、その遺構が保存され、公有地化が進められています。

左：筑後国府跡の石碑と看板

上：筑後国司のイメージ

作成：久留米市市民文化部文化財保護課